

# 契丹文字はどこにある？ 契丹大字碑文の新発見

松川 節

まつかわ たかし / 大谷大学、AA 研共同研究員

モンゴル高原で興亡を繰り返した遊牧集団は、口頭伝承を重視してきたが、それでも一部の文人たちは、自らのことばをさまざまな文字で書き記してきた。遙かな草原に佇む碑文は、モンゴルの人々にとって貴重な「箴言」である。

## 新たな碑文の情報

「中国との国境近くに漢文碑文があるらしい。」

2010年5月、モンゴル国の首都ウランバートルを訪問した筆者に対し、モンゴル人研究者A. オチル氏は新たな未確認情報を話してくれた。1996年以来、我々は日本・モンゴル共同「ピチェース」(モンゴル語で「碑文」の意)プロジェクトを推進し、ほぼ毎年、モンゴル国で調査を行ない、新たな碑文や文書資料を発見してきた。

今回の「漢文」碑文の当初の情報は、モンゴル国立文化遺産センターが国内の文化遺産の調査・登録を行なう中で、ドルノゴビ県エルデネ郡に6行から成る漢文碑文があるのを新たに登録したというもので、内容や研究の有無については何も情報がなかった。不審に感じられたのは、今までモンゴルで調査を行なってきた内外の研究者

がこの資料に全く注目してこなかったことである。もしかすると、ごく最近になってどこからか持って来られたものではないだろうか… 現地はウランバートルから585キロ、中国国境まで70キロの地点ということで、ジープで往復すると3泊4日の日程になる。我々は、過度な期待は持たず、行くだけ行って確認してみよう、それも調査だと、自らに言い聞かせ、2010年8月18日朝9時、ウランバートルをジープとワゴン車計2台で出発したのだった。

## ドルノゴビへ

国道は、ウランバートルと北京を結ぶ鉄道の線路に沿って南へと伸びているが、舗装されているのはウランバートルから250キロ行ったチョイルまで。あとは中国国境まで未舗装のダートが460キロ続く。初日の目的地は、ドルノゴビ県の中心地サインシャンダで、18時に到着した。

翌8月19日朝、碑文の位置をハンディGPSにセットして出発する。13時、同県エルデネ郡の中心地で昼食をとる。我々が車を降りるなり、現地の青年がよろよろと近づいてきて、あいさつ抜きでいきなり、「ヒヤタド・ヨモー？(中国人か?)」と問う。真昼間だが、かなり飲んでいるようで、話が通じる状態ではない。さっと緊張が走る。「ヤボン(日本人だ)」と応えると、なにごともしなかったように立ち去った。近年、モンゴルの豊かな地下資源を外国企業が狙っているという認識がモンゴル国民のあいだに広がりつつある。ここ数年、我々が碑文調査のためにモンゴル草原やゴビ地帯(モンゴル国から内モンゴル自治区にかけて広がる高原砂漠地帯)深くに入り込もうとすると、現地の遊牧民たちは強い警戒心を示すようになっている。草原で調査をしていると、現地の自警団を称する若者がバイクでやってきて、「出ていけ」と怒鳴ることもある。そのような時は、モンゴル側研究者が我々の調査目的を懇々と説明してくれる、事なきを得てきた。逆に言うと、今やモンゴル国で外国人が単独で調査を行うことは、命知らずだと言っても過言ではなからう。

GPSのおかげで迷うことなく、16時45



フレイニ・オボと契丹大字碑文。



契丹大字碑文の拓本を採っているようす。

契丹大字碑文正面。





分、碑文の立地点に到着した。碑文のすぐ側に大きなオボー（＝モンゴル人が天を祭る積石塚）があり、「プレーニィ・オボー」と呼ばれ、かつそれが地名になっている。付近は全体に小高い丘状の地形で、最も高い地点にオボーが立ち、碑文はその南東側20メートルの位置に南東に面して建っている。碑石は縦179.5センチ、横54センチ、厚さ30センチの花崗岩製である。南東の正面のみに文字が刻まれており、縦書きで計7行、全部で250字程度の文字が認められた。表面は全く磨かれておらず、自然石の状態のままに文字が刻まれているため、極めて判読し難い。

### 漢字ではない！

さて、この碑文の文字は、我々が検分した結果、一見して、漢字ではなく疑似漢字であることがわかった。モンゴル側がこれを「漢文」とみなした理由は、文中に「月」や「日」といった漢字と同じ象形字があるためだろうが、それらとともに、漢字には存在しない「委」や「朮」といった疑似漢字が見られており、特に、一番右の行の最初の文字「委」は、契丹大字に特有の文字である。

それゆえ、この碑文は、岩壁銘文などを除き、モンゴル国で初めて発見された契丹大字碑文である可能性が高いと我々は判断した。しかし、眼視で、それ以上の文字の形状を抽出するのは極めて困難であり、字形の確定ができないまま日没を迎えたため、その日は現地にて野営することにした。我々は碑文から100メートルほど離れた地点にテントを構え、ゴビ地帯の生温かい風が吹きすさぶ中、日の出を待った。

8月20日早朝、ゴビ地帯にしては奇跡的とも思える無風状態が数時間続いた。拓本を採るチャンスである。我々はさっそく作業を開始した。しかし、碑面がまったく磨かれていないため、凹凸が激しく、拓本紙を碑面に密着させることは極めて難しい。今までにモンゴル国で数多くの拓本を採ってきたが、これほど凹凸の激しい碑面は初めてであった。このことは、のちの解読において大きな支障をもたらす結果となった。

昼前、風が強まり、拓本紙が風にたびいて作業の中止を余儀なくされる。昼食後、我々は現地をあとにし、夕刻、サインシャンダに帰還した。

採りたての拓本を改めて仔細に検討すると、碑文冒頭の字は、やはり契丹大字に特有な「委」と読める。さっそく電子メール



ウランバートルでの記者発表会。



契丹大字碑文冒頭9文字の解読。

委 朮 州 朮 交 月 一 日  
清寧 四年 八月 一日

と電話で、契丹文字を専門に研究する武内康則氏に連絡をとり、この碑文に書かれている文字が契丹大字であることを確認した。

### ウランバートルへの移送

こうして、本碑文は契丹大字で書かれていることが確認され、発見された地名から、「プレーニィ・オボー契丹大字碑文」と命名することにした。我々は8月21日にサインシャンダを出発し、8月23日、この新発見を一刻も早くモンゴルの人々と共有する目的で、ウランバートルのモンツァメ通信社で記者発表会を開催した。発表結果は、その日のうちにモンゴルの各テレビ局で放映され、インターネットに掲載された。

モンゴル人にとって契丹は、モンゴルが登場する以前にモンゴル高原を支配していた集団として理解されている。それゆえ、契丹に関わる都市遺蹟や契丹文字による岩壁銘文は、今まででもある程度は調査・研究がなされてきた。とはいえ、モンゴル国で見つかっている契丹文字資料のすべてを占める契丹大字については、解読がほとんど進んでいないため、その価値が重要視されているとは言えない状況であった。



モンゴル国立博物館に展示中の契丹大字碑文。

しかしながら、今回の新発見はモンゴル側にとっても大きなインパクトだったようである。「プレーニィ・オボー契丹大字碑文」はモンゴル国立文化遺産センターの関係者によってウランバートルに移送され、モンゴル国立博物館1階の「テュルク・ウイグル・契丹時代展示室」に展示された（2011年5月30日に展示室に設置されたという）。

### 時を超えて

この碑文は、11世紀に建てられて以来、一千年近くのあいだ、ゴビ地帯にひっそりと佇んでいた。多くの人々が碑面の文字を覗き込んできたはずだが、驚くべきことに、それらについての記録は一切残されていない。このことは、情報通信技術が発達し、グローバル化が進むモンゴルにおいて、まだまだ未知の文字資料が草原に眠っている可能性を示唆している。そして忘れてはならないのは、こうした貴重な文字資料は、博物館を訪問するモンゴルの老若男女すべての共有財産であるとともに、世界的にも貴重な遺産であることである。モンゴルの貴重な文化遺産の保存・保護のために世界中が注目していることを、モンゴルの、特に若い世代の人たちに理解してもらいたいと願っている。